［教育目標］
健 自 貴
康 主 任

小原田中だより

令和７年７月号
郡山市立小原田中学校
校長　関根宏房
ホームページＵＲＬ
https://www2.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=0720007

夏休みを前に　利用状況確認

六月下旬に全県下において「インターネット利用と健康に関するアンケート調査」を実施し、その結果が、数値のみではありますが届きました。

一部ではありますが、特に気になった部分につきまして、お知らせいたしますので、今後のお子さんの利用の参考にしていただければと思います。

まずは、普段使っている機器として、自分のスマホ（８１％）、携帯型ゲーム機（７０％）、タブレット（４４％）、パソコン（２５％）家族のスマホ（１２％）等となっています。複数選択可能であることから、所持率と考えることもできる数値かと思います。

この中で、一番使う機器は、自分のスマホ（７０％）、タブレット（１０％）、ゲーム機（６％）と続きます。興味深いのは、二番目に使う機器としてゲーム機（３７％）に次いで、学校から配付のタブレット（２５％）、タブレット（１８％）となっているところです。

ではそれを使って何をしているのかということになりますが、調査を行った時期の最近一週間に限定してとはなりますが、動画を見る・音楽を聞く（９１％）、ＬＩＮＥやＤＭなどでやりとりをする（７５％）、学習する（４７％）、友だちのＳＮＳ（Ｘやインスタ）を見る（４４％）、友だちとゲームをする（３４％）と続きます。今どきの関係だと思ったのが、実際に会ったことのない人とＳＮＳやゲームで話す・やりとりする（１２％）で、さらに怖いのは、ＳＮＳやゲームで知り合った人と実際に会ったという子が限定された一週間に２人いたというところです。

情報化社会への対応を視野に入れ、学校教育の中では、機器の使い方、情報モラル、そして事件・事故に巻き込まれないために、について指導しているところです。ＳＮＳ利用を巡るトラブルが後を絶たない昨今、大人の目が離れがちとなる夏休みを前に、再度確認しておきたいと思います。

今や本校生徒の所持率８割を超えるスマートフォンですが、学校が推奨しているわけではありません。機器利用、情報活用能力の育成に必要なタブレットは、一人一台端末として配付し、自宅への持ち帰りもできる状態となっています。

子どもたちの成長の状況に応じて、制限をかけ、個人情報の扱い、直接顔を見てコミュニケーションをとる段階での思考力、判断力、表現力の育成を充実させ、将来的に電話やＳＮＳ等で、直接顔の見えない相手とコミュニケーションをとる際にも、自分を守り、相手を不快にさせず、配慮できるようになることを目標に取り組んでいるところです。みんなが持っているから、みんながやっているからというだけで、持つべきものでもないように思います。そして、持ったからには、無責任な使い方はできません。たとえ中学生といえども法に触れるような使い方をすれば罰せられます。

持つべきか、持たないべきかで一度選択があります。その後もアプリを使うべきかどうかで、また選択があります。幾重にもなった選択の先で、トラブルが起きたとすれば、全て自分が選択した結果ということを自覚しなければなりません。

学校教育は、その判断基準や一般的なトラブル回避の方法について一般論として指導することはできても、強制力はありません。実際の契約者である保護者と、利用者である本人とで、正しい選択がどれかを見極めながら判断すること、それが持つ者としての責任となります。

一学期の終業式では、これまで子どもたちが学校教育の中で学んだ知識、技能を駆使して、夏休み中に安全で、充実した生活を送るよう話しました。

ご家庭でも、安全な選択ができるよう、お子さんと一緒に考え、導いていただければと存じます。

西田先輩の同級生をお招きして第２弾

手つなぎ鬼の喧嘩から、急展開で西田さんと友だちになった村上賢一さん。その後、どのような過程を経て、何十年も続く友だちになっていったのか、その秘訣を話してくださいました。

仲良くなって一年くらい経った頃、香久山神社の境内を西田さんと二人で歩いていた時、西田さんがこう言ったそうです。

「賢ちゃん、もしかしたら俺、もらいっ子かもしんねぇんだ。」一瞬ドキッとした村上さん。「俺だって一人っ子だし、もらいっ子かもしんねぇんだねぇの。」と返し、その時の話を終わったそうです。それからそのことが気になっていた時間が随分あったそうです。互いにある程度大きくなってから、西田さんが村上さんに打ち明けたのが、西田さんが５歳の時に、香久山神社に住んでいた伯母さんに預けられたようで、なんとなくそのことを覚えているということでした。それを聞いて驚いた村上さんでしたが、自分がビックリし過ぎると西田さんにショックを与えることとなるため、「そんなの、誰でもあるんじゃねぇの。」と、さらっと流したそうです。自分の耳に入ったこと、目に映ったこと、それに対し、そのままに反応するのではなく、自分の返しを相手がどう感じるかまで考え、言葉を返すこと、正に相手を思いやる気持ち、これを互いに小学生の頃から持ち合わせていたということでしょうか。

そうやって仲良くなった二人でしたが、ここに留まらず、齊藤さんや安倍さん、邦一さんらを一人、また一人と仲間に加えていき、ついには六人になったそうです。

仲間がこのくらいいると、約束をして集まったときなど、一人くらい都合が悪くなって来れなくても、あまり気にせず次の行動に移れるという、何とも大らかな関係性になるようです。そして、この六人が一緒にいて話をしていると、すっかり懐かしい昔に戻ってしまうそうです。これが五十年以上もの間、友だち関係が続いた秘訣ではないかと、村上さんは言います。そして、こういう仲間がいるから、西田さんは、いつでも郡山に帰って来たそうです。阿武隈川が大好き、安達太良の山が大好き、ちょこっと見える磐梯山も大好き。大きくなって東京の方へ出て行くと、どうしても生まれたところの景色がいいんだなぁと、村上さんは続けます。

小原田中学校の校舎は、西田さん、村上さんらが在籍していた頃は、今の半分だったそうです。バレーボールをして泥だらけになっていた頃を思い出し、西田さんは、小原田中学校に来て校庭の土をいじってみたりしていたそうです。セッターをしていた西田さん、アタッカーをしていた村上さんは、二人とも目立ちたがり、人気者になりたがりで、周りの女の子たちにチヤホヤされるのが好きだった話もしてくださいました。

「西田は、もの凄く優しい。優しいということは、みんなから好かれる。好かれるということは相手の気持ちになるということなんです。」村上さんは言います。「必ず自分の中に人が二人いるんです。今の自分が一人と、話しかけて、こういうこと自分。話しかけて、こういうこと言われたらもう一人の俺はどういう気持ちになるんだべ。面白くねぇよなぁって思ったことは、相手には言わない。」また「体の中には二つの自分を持っていて、言う自分と、聞く自分とがあるのが凄く大事なことだなぁって、西田と付き合ってて中の児童生徒が、西田敏行さんの楽曲を合唱するゲストとして出演します。当日の模様はラジオ福島で生放送されます。

感じることがいっぱいありました。」と振り返ります。互いに相手のことを気遣う気持ちが、居心地の良い関係を作り上げたのだということを子どもたちに一所懸命伝えてくださいました。

同級生の皆さんが小原田中学校へ来てくださった時に、私からお願いしたことが二つありました。一つは、「西田さんが小原田に頻繁に帰ってくるような友だち関係が、今の年齢まで続いた秘訣を子どもたちに話していただきたいこと、もう一つは、楽曲「あの街に生まれて」ができた背景を教えていただきたいことです。今の中学生が、友だちをつくるのに大変苦労していることをお伝えすると共に、「あの街に生まれて」に込められた想いが、幼少期からの友だちとの関係が基になっているようにも思えたことをお伝えし、お願いしたところです。

皆さん、それぞれにお話くださいました。今回は村上賢一さんとのエピソードを中心に記載させていただきましたが、まだまだお伝えし切れていません。また次の機会にお伝えしたいと思います。

西田敏行展　合唱団結成！

九月十三日（土）郡山市立美術館石庭を会場に行われるトークショーに、小原田中生もゲスト出演することが決まりました。

「ボクらにとっての西田敏行さん」をテーマに脚本家の宮藤官九郎氏とフロンティア大使の箭内道彦氏がトークショーを行います。そこに、小原田小・中の児童生徒が、西田敏行さんの楽曲を合唱するゲストとして出演します。当日の模様はラジオ福島で生放送されます。

（結成された十五名の合唱団）